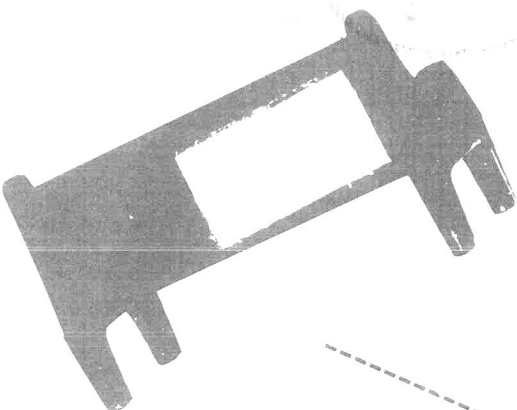
国際結婚終着駅

もうひとつのクレイマークレイマー

馬場恭子

国際結婚終着駅

もうひとつのクレイマークレイマー



際結婚終着駅

一九八二年六月三十日　第一刷発行

著者——馬場恭子

© Kyoko Baba 1982 Printed in Japan

発行者——三木　章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三丁目三—三　郵便番号一二三　電話東京〇三—九四五—一二一　振替東京八—三九三〇

印刷所——慶昌堂印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——九八〇円

落丁本・乱丁本は、御面倒ですが、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

まえがき

一九五〇年の八月、十三人の日本人男女学生がゼネラル・ゴードン号（元米軍輸送船）の三等船客として、真夏の太陽でギラつく太平洋を渡っていた。当時の日本はまだ占領下で、留学できる若者は、アメリカに強いコネを持っているか、よほど運がいいか、そのどちらかであった。

ゴードン号上の学生たちは、この後者に属していた。米大学の奨学金をもらえても、日本とその大学を結ぶ往復旅費がないと、渡米が許されなかった時代に、幸運にも、米軍司令部職員有志たちの好意で「留学生旅費奨学金」をもらえたのだった。

私もこの「幸運組」の一人だった。しかし、不安におののいていた。日本人がアメリカ人たちと同じ電車に乗ることを許されない、敗戦後の「差別社会」から、私は突然解放され、こうして基本的人権を改めて認められたのである。現実感がなかった。

日本人がまだ、米軍放出物資のトウモロコシ粉をだんごやパンにして飢えをしのぎ、古毛布をオーバーに仕立てて寒さに耐えていた時代である。私の見たアメリカは、英語でいう「ツーマッチ」だった。

真っ昼間でもネオンはつけっ放し。ふきん、ハンカチ代りに紙を惜し気もなく使い捨てにする。食物をどっかと皿に残しても平然としている。それまで私が見たこともない「テレビ」を居間に据えつけて野球見物をしている庶民たち。一方、非国民共産党員追放を叫んで荒れ狂う「マッ

カーシー旋風」下で、アメリカン・デモクラシーは、苦悶していた。すべてが驚異の体験だった。

この機械文明の最先進国から、敗戦の屈辱と物資の欠乏であえぐ祖国にまっすぐ帰ると、私はダメになるのではなかろうか、とだんだん心配になってきた。

〈そうだ、スイスの山で私の好きなレコーダー（木笛）を吹きながら、アメリカで体験したことをじっくりと、私なりに消化してみよう〉

留学三年後、私は笛を抱えてヨーロッパを半年ほどさ迷った。スイスの山にはいけなかったが、ローザンヌ湖畔でひとり笛を吹いてみた。木彫りの大家〝リーメン・シュナイダー〟の作品を追い、ドイツの古い教会巡りもした。とうとうヨーロッパで旅費がなくなり、友人、義兄に迷惑をかけ、やっと日本にたどりついた。出迎えの母が、オンボロオーバー姿の私を見たとたん、あきれた口調でいった。

「あんた、まるで西洋乞食みたいやな」

あれから三十年余の間、私の心は東西文化間を遍歴しつづけてきた。私の体験した東西文化交流のもつれ合いを通して、読者の方々により深く日本人、アメリカ人を理解していただければ、著者として、それ以上の幸福は望めません。

この本は、多くの友人知人のモーラル・サポートがあったからこそ、やっとたどりついた終着駅。心から感謝します。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さて、読者の方々のために、私の履歴を簡単に述べれば……。

私は大分県別府市で生まれ、四年制女学校を卒業後上京し、津田英学塾（現津田塾大学）予科に入学した。一九四四年九月、津田英学塾を卒業したが、戦後、慶応義塾大学法律学部政治学科に入学し直した。一九五〇年、卒業と同時にミシガン大学の「東洋婦人のためのバーバー奨学金」を運よくもらって留学した。ミシガン大学大学院政治学科に入学、修士号をとったあと、経済学部に籍を置いたが、一九五三年秋、帰国を決意し、半年間ヨーロッパをまわり、帰国した。

「自由にものがいいたい」ので新聞界に入ることにしたが「大学卒業後道草をくっているし、しかも女であるため」英字新聞界に入ることにし、一九五四年、アサヒ・イブニング・ニュース（当時は東京イブニング・ニュース）に編集長秘書として入社したあと、リポーターに昇格、髪をふり乱して働いた。

五年後、「イモを食べても、フリーランスになってババ・キョーコとして生きます」と大みえを切ってフリーランスになった。そのあと二年間、シカゴ・デイリー・ニュース支局で仕事をしたが、この間も、ジャパン・タイムスに「チョイス・フロム・ウィークリーズ」という週刊コラムを創始し、フリーランス業を開拓していった。

イブニング・ニュース時代は、タイプを叩いて記事を書いていた。その片手間に、ラジオ・ジャパンの国際英語放送の翻訳のみならず、本人取材原稿を作り、おこがましくも、それを読んで放送までしていた。

東京オリンピックの年には、ＣＢＳの特別ドキュメント『東京の五つの顔』製作にも、のめりこんで、テレビの味も覚えた。英語カラー放送のＪＣＴＶ（ジャパン・ケーブル・テレビジョン）が開局するときには、帰京し、開局準備を手伝った。

現在している仕事も多様で、日本の、アメリカ取材班ドキュメント製作にコーディネーターとして参加し、若い連中と一緒にアメリカのあちこちを走り回ったりするが、それも楽しい仕事のひとつになっている。また、月一回、アサヒ・イブニング・ニュースに「レターズ・フロム・ニューヨーク」というコラムを英文で書きつづけて、かれこれ四年になる。一方、グロービュー社発行のビジネスマンのための英語雑誌『ビジネス・ビュー』にアメリカ経済学者、ビジネスマン、著名人などのインタビューアーとしての仕事もしている。

こうして映像（ビジョン）でものを書く楽しみを味わっているくせに、ビジョンでものを書く限界にイラついたりする。チームワークのわずらわしさから、ペンでものを書く孤独の世界に逃げこみたい衝動に駆られる。そしてまた、ペンと紙だけの世界で自分と対峙（たいじ）する楽しみに溺れるのである。

これからも、映像による表現にたまらない魅力を感じ、映像と文字の世界を行ったり来たりするかもしれない。しかしもう、自分の本性にさからわないで、自分の能力の可能性を探求しながら生きぬこうと思っている。

一九八二年初夏

ニューヨークにて　馬場　恭子

国際結婚終着駅　目次

まえがき
第一章　ニューヨーク・ニューヨーク　7
第二章　離婚闘争　51
第三章　母と息子　127
第四章　ルーツ作り　165

装幀／田中丈晴　撮影／大塚佳男

初めて出版するこの本を、
私の愛する亡き父母と、
私の大切な息子ケンジに、
心をこめて捧げる。

第一章　ニューヨーク・ニューヨーク

離婚が許可された日

「自由の女神」が間近にみえるマンハッタン南端を北東にあがると、市役所（シティ・ホール）と南京街（チャイナ・タウン）の中間にニューヨーク州最高裁判所がある。丸いドームを支えて建つゴシック風の建物である。三十段ぐらいであろうか、建物の前に広がる石段を登りつめ、なかに入ると、頭上はるか高くをめぐる丸天井に囲まれる。ビザンチン風の天井にぎっしりと描かれているのは、モーゼの十戒をはじめ西洋法体系のもととなった歴史的シーンの数々である。今日のわれわれを支配する法の威力を感じさせられ、訪問者は誰でも一瞬たじろぐ。

一九七二年晩秋の朝、私は友人のキャロリンとその石造りの階段を正面玄関に向かい、黙々と登っていた。私の離婚裁判の判決日であった。

みじめな結婚から私が法的に解放される今日、この石段で「万歳！」と、すなおに日本人らしく叫ぶか、あるいは照れかくしにピョンとはね、おどけてみせようか。いずれにしろそれほど私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

は、この日を待ちぬいて生きてきた。複雑な家庭事情のため、親権闘争もからみ、三年前の別居につづくこの離婚裁判は、もめにもめぬいた。あともう一年もつづいたなら、私の身も心もバラバラにくだけたにちがいない。

それなのに、いざ離婚成立が現実になってみると、全身の力がぬけた。これから女ひとりで、まだ八歳になったばかりの息子をかかえ、どこでどうやって生きていったらいいのかという明日への不安で、気ばかり重くなっていた。石段に、足がのめりこみそうだった。

それにもっと気がかりだったのは、私と並んでハイヒールの音をたてながら石段を登っているキャロリンの将来だった。彼女も今日、法的に女ひとりになっていた。彼女は小説家のご主人と別居生活をしていたが、今朝、そのご主人が首をつって死んだ。ウエスト・ヴィレッジのアパートでひっそりと——。

その知らせに仰天した彼女は、タクシーでかけつけ、そのみじめな姿と対面した。その足で、私の離婚裁判の証人（ウイットネス）としての責任をはたすために、彼女は来てくれたのだ。

今朝、約束の地下鉄駅で会ったとき、私はまだそのことを知らなかった。彼女のぬけるように白い皮膚はいつもより青白んでみえた。キャロリンは、私のほおに軽くキスをし、

「ハウ　アー　ユー？」

と、ややハスキーな調子であいさつし、ほほえんだだけであった。私たちが、不協和音をたて

てきしむニューヨークの地下鉄を降り、裁判所の方向へと歩きだしたときにはじめて、
「ダンが死んだのよ」
と、彼女はポツンといった。
「ええっ？」
不意をうたれ、私はおもわず声をしぼった。
「首をつって死んだのよ」
と、彼女も声をしぼり、澄んだ青空をふり仰いだ。彼女の目も碧(あお)い。あまりのことに声もでず、私はただ繊細な彼女の横顔とそのかなたに広がる青空を見ていた。冷気におそわれたときのように身体の硬直を覚えたが、やっと声を押しだすようにいった。
「どうして電話してくれなかったの？　いくら私の離婚裁判の証人だからといっても、無理することはなかったのに……。さ、今、タクシーで帰って！　私もあとでお手伝いに行くから。ごめんなさいね、ほんとに」
「いいのよ、心配しなくても。今日はあなたの一生でとても大切な日よ。それに、私もこうして動いているほうが、気がまぎれていいの」
彼女は歩きながら、つづけた。
「でも、裁判がすんだら、私、すぐに失礼するわ」

運命のいたずらとはいえ、別居していた親友同士の子連れ女性が二人、同じ日にとつぜん結婚という契約から、法的に解除された。そして、日本流に表現するならニューヨークで四十万という「母子家庭」の仲間入りをした。私は最高裁判所の石段を登りながら、その不思議さをかみしめていた。

裁判所の正面玄関で、ユダヤ系の若い弁護士ウエックスラー氏が私たちを迎えた。彼は、八頭身どころか十二頭身もあるその大きな長い身体に小さな童顔をのせ、大股にさっさと歩く。裁判所五階の離婚裁判法廷の冷たいベンチに腰をかけ、私は順番を待った。その間の落ち着かなさは、日本人向きでないアメリカ製ベンチの高さのために、私の足が宙ブラリンでぶら下っていることで、よりいっそう刺激された。

金ボタンのついた紺の制服、白いワイシャツ、紺ネクタイをしめ、赤茶のちぢれ毛を肩までのばしている法廷書記が、やっと私の名を呼びあげた。私の出番なのだ。急に緊張感におそわれ、首すじが硬直した。ひざがしらが震えそうになるのをおさえながら、弁護士のあとに従い、一段と高い壇上の裁判官の前に歩みよった。キャロリンも二、三歩はなれ、私の後ろについてきた。

そのとき突然、これから他人となる夫の弁護士が私たちの仲間に加わった。双方了解ずみの「夫欠席離婚裁判」なので、夫はもちろん現われなかった。あとで聞くところでは、彼はその日、ニューヨークにもいなかったという。

白いワイシャツの上に黒いガウンを着た裁判官は、ロマンス・グレーでやせぎみな、ごく平凡なアングロ・サクソン系男性だった。その人の前に歩みでてから、私は日本式にていねいなおじぎをし、おそるおそる顔をあげた。その刹那であった、裁判官が口を開いたのは。

「日本の女性は夫に従順であると聞いているのに、あなたは離婚がしたいのか？」

この尋問ともつかぬ、好奇心だけともいえぬ意外な言葉に、私は足もとをすくわれた思いで一瞬ドギマギした。しかし、顔をあげ、裁判官の目をまともにみつめ、神妙に答えた。

「アイ　アム　ソーリー、バット　タイム　ハズ　チェンジッド（申し訳ありませんが、時代が変りました）」

そして、軽く頭を下げた。

裁判官は、ホオーッといいたげな顔つきでこの種の法廷には珍しい日本女性、私の顔にもう一度好奇な目をくれた。だがただちに、あっさりと、

「なるほど。では、離婚を許可する」

といい、気軽に机上の離婚成立書にサラサラとペンを走らせ、サインをしてくれた。

その日、こうして私と息子ケンジ二人の核家族、日本流にいえば「母子家庭」、アメリカ流では「単親家庭（シングル・ペアレント・ファミリイ）」の誕生となったのである。

一九八〇年のアメリカ合衆国国勢調査局統計によると、アメリカ総世帯数は八千三十七万強だ

が、その一五パーセント以上、つまり、千二百十六万余の世帯は、ほとんどが女性を家長とする「単親家庭」である。一九七〇年にくらべるとなんと六七・四パーセントの増加だ。

しかも一九七〇年には「両親家庭」（ツー・ペアレント・ファミリイ）十四世帯に対し「単親家庭」は一世帯であった。それが一九八〇年には、四対一の比率になったのだ。その原因はますます上昇する離婚率にもある。一九六〇年から、一九七〇年、一九八〇年へとかけ、既婚者の離婚数は千人につき、三十五人、四十七人、百人と急上昇している。ことに三十歳以下の離婚者数は、同じく千人につき、二十三人、三十八人、九十四人と急増加をみせる。

つまり、過去二十年間に若者たちの離婚率は四倍、過去十年間に二・五倍もはねあがったのである。アメリカ人は子供のためにがまんしようと努力する、あるいは、泣き寝入りすることがもともと日本人よりずっと少ない。それどころか、核家族の先輩、アメリカにおける若い夫婦の結婚破綻は、子供が生れたために起こる生活の変化を処理できぬことからはじまるケースが多い。父母、子供が緩衝地帯として逃げこめる祖父母のふところを失った、核家族形態にも一因がある。

キャロリンと私も、同じように、一九七二年の単親家族統計数の中にうずめられることになった。もし、別居統計表なるものがあるとしたら、私は一九六九年、キャロリンは一九七一年の数字に押しこめられているはずだ。

キャロリンの夫、ダンは、日米を問わず文筆業の男性によくみられる、女性的な細い神経の持ち主の四十男であった。八歳の娘と六歳の息子の父親である。シンは強いが女性味あふれる、優しくて美しいキャロリンと、マンハッタンのイーストサイド・アップタウンにメイドルームまでついた、広々としたスリー・ベッドルーム・アパートに住んでいた。そのダンが、ある日、突然、こういった。

「キャロリン、私は自由になりたい。今まで家庭に縛られて落ち着いてものも書けなかったが、自由になって思いっきりものを書いてみたいのだ、死ぬまでにね。キャロリン、たのむ、お願いだ！　どうかひとりにさせてくれ」

キャロリンはおどろいた。東京オリンピックのときには、あるアメリカ雑誌社の特派員をし、一年間家族ぐるみで楽しい東京生活も送ったというのに――。ニューヨークに帰り住んでからも、幸福な結婚生活を、彼も楽しんでいたとばかり、キャロリンは思いこんでいたのだ。

そのすぐあと、彼はタイプライターを抱えてでていってしまった。グリニッチ・ヴィレッジにワンルームのスタディオ・アパート（台所、居間、ベッドルームがひとつの部屋にあるアパート）を借り、文筆一本やりの彼だけの生活が、こうしてはじまったのである。

それでも週末には子供たちに会いにきた。ときには子供たちを公園や美術館、映画などに連れだしたりしていた。つまり、土・日曜日になるとマンハッタンにあふれでる、別居あるいは離婚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.